



発行所 アシュラムセンター
523-0894 近江八幡市中村町 567-2
Tel 0748-33-4030
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ
www.ashramcenter.jp

編集 アシュラム誌編集委員会

振替 01050-6-53772
アシュラムセンター

印刷 明文舎印刷商事(株)

解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもって前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

今年の夏は、カトリックの井上洋治神父の著作集を読んだ。ある熱心な井上ファン姉妹が、「先生、これを読んだらいいわよ」と全部で5冊の分厚い全集を貸してくださったのだ。やらなくてはならないことに追われる毎日の中で、夏休みは、じっくりと読書のできる大切な時であると思っている。昨年の夏は、ブルームハルト父子を、そして今年には井上神父の著書を読むことになったのは、なんだか不思議な気がする。というのも、両者とも、私が神学部に通っている頃、今から30数年前に読んでいた本だったからである。なかでも『日本とイエスの顔』には、大変大きな衝撃を受けたことを覚えている。それ以来しばらく、井上神父の個人誌『ブネウマ』も定期購読していた。

「ヨーロッパ・キリスト教だ」をキリスト教だと思いでいた私が、日本人は日本人であることをやめることなく、日本人のものの考え方と心情でイエスの福音をとらえればよいのだし、またとらえるべきだと確信した(井上洋治著『イエスを運んだ男』より)との言葉は、当時の出来の悪い神学生であった私にとつて目からウロコが落ちるほどの衝撃であったことを覚えていた。「ルトマン、ケーゼマン、モルトマン。ドイツの神学者はみんなマンばかりだな」などと言つては、日本語訳の意味さえよく分からぬまま、ドイツ語原文の神学書に悪戦苦闘する毎日の中、東大哲学科を出て、フランスやローマでカトリック神学を極め尽くした碩学の井上神父の言葉は私の心の奥深くに響いた。「日本人の心情でイエスの福音をとらえ

瞑想

そこで見よ。後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。

ルカ13:30

主幹牧師 榎本 恵

とおさねば、イエスの福音が日本人の心の琴線をかきながらすることはできないだろう(『日本とイエスの顔』より)の言葉は、まさに私自身のモヤモヤしていた心の琴線をかき鳴らしたのだ。そして今、こうしてクリスマスチャンシアシュラム運動の牧師として立つ時、このカトリックの井上神父とアシュラム運動の創設者スタンレージョーンズ博士の言葉が共に響き合ってくる。博士もまた、長いインド宣教の中で、西洋文化や哲学によるキリスト教の土着化の限界に気づき、そしてインドそのものの中にイエスキリストを発見するのだ。「ここで私たちは最初のクリスマスチャンシアシュラムを出発させた。インド精神の中にキリスト教の内容、黙想、靈感、献身、苦行的性格を持つ単純さなどを取り入れた(『神の然り』より)」。これが私たちのアシュラムの

と考えていたユダヤ人や律法を厳格に守ることによってしか救いに入れられないとした律法学者たちにとつて、イエスの教えは許し難いものであったと言える。同時に異邦人クリスチャンにとつては、律法にも、ユダヤ人の慣習にもよらず、ただ信仰によつてのみ救いに入れられるという、この主の約束は大いなる喜びであつたに違いない。そしてそれはそのまま、このアジアの、そして日本のクリスチャンにとつても同じことである。後なる者が先になる世界がある。私たちがユダヤ神学やギリシヤ哲学に精通しなければクリスチャンになれないのではない。西洋の価値観やその生活習慣、言語を身につけなければ、救われないのではない。私たちが救われるのは、ただ「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神はイエスを死者の中から復活させられたと信じる」(ロマ10:9)のことだけなのだ。しかし友よ、忘れないほしい。後なる者が先になる世界は、同時に先なる者になったことと同時にすぐ後になることである。「イエスは主なり」私たちは日々この告白をしなければなら

口ケ地 伊江島。暗い壕を抜けると、目の前には…真っ青な世界がどこまでも…!



(写真左) (日本キリスト教団葬教会)

演の満島真之介さんと監督とのトーク。ミーハーの私は、ハンサムな生ミッシマを間近に、話題にも共感し、即ファンとなりました。

2つ目は、サマリア人病院での詩の朗読会。詩集「風が光る」を読みましたので、楽しみにしていました。果たして期待に違わず、素敵な構成でした。精神を病み、苦しむことが多い中で、一杯生きたい、生きて

善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる」神様は、敵を愛せ、敵のために祈れと言われる。阿波根のおじいのように到底なれない私は、どうしたらできるのかと考えあぐねていました。

恵みの時、ファミリーの分かち合いも、メンバーの方から御言葉からの思いを聞くことができ、良き時でした。

今年度の主題聖句は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタ11:28) 開会礼拝、静聴の時、聖書を読むごとに、沈黙の中で多くの御言葉による示唆を受け、新たに気づかされ、奥深さを感じることができました。

今年度の主題聖句は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタ11:28) 開会礼拝、静聴の時、聖書を読むごとに、沈黙の中で多くの御言葉による示唆を受け、新たに気づかされ、奥深さを感じることができました。

自分自身を、主に福音して頂かなくては、証すること、メッセーヂすることもできないということを、また、霊性を深めることの大切さをより痛感いたしました。

主イエス・キリストの解き明かしに心を傾け、祈りつつ、レビの時を大切にしていきたいと願っています。

今年度の主題聖句は、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタ11:28) 開会礼拝、静聴の時、聖書を読むごとに、沈黙の中で多くの御言葉による示唆を受け、新たに気づかされ、奥深さを感じることができました。

第42回 教職アシラムに参加して

高橋 つる

奨励の時間、祈りの時のお一人おひとりメッセーヂが心に響きました。また、アシラムの歴史が伝わってまいりました。



山子 (広子) 礼子 (沖繩) 感謝 萬里子 (常任) アシラム 三好 悦子 藤本 美津子 長瀬 天の友を 寛光 和伊 伊達 本百々 榎本 ちいらば 牧師記念 チャペル 夕礼拝 静岡聖書教室 安仲 池谷 滝澤 浦添 ナザレ 教会 東渡部 吉伊達 矢野 鹿屋 キリスト 村松 片岡 米田 湯野 岩波 櫻本 大派 キリスト 教会 山シ 112 口 ¥1,308,976 国際正義・平和 アシラム 40 周年 記念 前松 平 千裕 持田 加藤 菅原 大門 山 野 降 猪瀬 無 安藤 田 尾崎 尾崎 家形 無 西本 美佐和子 渡野 佐和子 土橋 康子 米田 歌子 湯野 岩波 静久一 アシラム 25 口 ¥258,000 ヨセフ基金 吉田 すみえ ちいらば 牧師記念 チャペル 夕礼拝 無 名 氏 アップちゃん シュラム 君 4 口 ¥5,700 合計 141 口 ¥1,572,676 感謝いたします

瞬きの詩人

水野源三の世界 32

三浦綾子記念文学館特別研究員
森下 辰衛

母よありがとう

私の手となり 足となり
悲しみ 苦しみを
一緒にになってくれた
母
源三を み国へ送ってから
ゆきたいと
いつも話していた
母

先にゆくのが
すまないと言って
早春の朝
み国へ召されてしまった
母



母うめじさんは、坂城の隣の戸倉上山田から水野家に嫁いで、夫の寛さんとの間に三男二女を産みました。昭和の戦争が終わった翌年の夏、次男源三が赤痢の高熱によって脳髄麻痺を発症、重い障害を持つ身となりました。

その源三の心を知るために母は五十音表と瞬きで一文字ずつ書き留める方法を発見しました。息子が13歳で受洗しクリスチャンとなると、母は息子の手となり足となり、共に様々なものを担うために、自ら求道を始めました。やがて生み出された俳句「庭すみの寒菊に雪降りかかる」は、母にとって、わが子にも何かを作り出す力があるのだという希望となりました。

うめじさんは、60歳で子宮癌で召されますが、その末期の痛みの中で、母が思うのは子どもたちのことです。母の一番の心配は源三さんでした。他の子どもたちはみな結婚して家庭をなし、仕事を持ち、心配すればきりはないが、それぞ

れの人生を歩んでいる。けれど、この息子は一人では生きることができないのです。この息子には手となり足となる存在が必要で、悲しみや苦しみを一緒に担ってくれる人が必要であることを、母は知っていました。だからこそ、“源三を み国へ送ってからゆきたい”

それが胸にあふれる唯一の願いであり、何としても果たさねばならない仕事だったのに。それを果たせずにゆくことの心残りが、病んだ母にはありました。

源三さんはあらためて、思うのです。母は、悲しみ苦しみを一杯に抱えていたこの私を、いつもそのまま背負ってくれた母だったと。そして、母としていちばん重い悲しみ苦しみの理由そのものでもあった私を、背負い続けてくれた母だったのだと。

母は、「先にゆくのがすまない」と言って、「早春の朝 み国へ召されて」ゆきました。母には天国への確信がありました。自分が天国にゆくことにも、源三が天国にゆくことにも、疑いはなかったのです。ただ、先に行くのがすまない、という心だけでした。あんなにも背負い続けて来たのに、母は背負ってやれなくなるのを“すまない”と思うのです。

“すまない”という心は、なんて深くてやさしくて、人を潤すものでしょう。終わることのない謝罪と謙遜、終わることのない慈愛と心遣いのことばです。この世には“すまない”という心などない家と、“すまない”という心のある家と、二種類あるのかも知れません。この“すまない”という母の心は、終わらない温かさ、終わらない優しさとして、母の召天後も水野家にずっと引き継がれてゆき、水野家の一人一人を内側から励まして、源三さんの手となり足となる役割を果たさせたのだらうと思います。

早春は、復活の季節です。新しいいのちへの希望が、ほのかな紅色を帯び始めたような朝、母は、この息子からの、見えない「母よ、ありがとう」の花で飾られた道を、音にはならないけれども、こころいっぱい「母よ、ありがとう」の声で送られて、別のいのちに移っていったのでしょうか。

アシュラム修道場生活記 その9 『『同じことを続ける』ということ』

伊達 平和

先月「同じことをする」ということの大切さについて書いたが、「同じことを続ける」ということもまた重要である。ここでいう「同じことを続ける」こととは、「早天祈祷会に参加し続ける」ことである。筆者は、朝ごはんを動機として毎朝参加している（もちろんそれだけではないが）ことは周知の事実であるが、1年半が経過した今、この「同じことを続けること」がだんだん難しくなっていると感じている。

これには主に2つ理由が挙げられる。第1の理由は「早天祈祷会に出なくても門を叩けばるん福音食堂は開かれる」ということを学習してしまったからである。修道生は4名いるため、少なくとも1人が早天祈祷会に出ていれば、終わった頃にLINE（主に若者が使用するグループメール）に連絡が入る。例えば「早天おわりました。今日は唐揚げです」などが典型的な例である。布団の中でまだ意識が朦朧としていても、直ちに「唐揚げ！食べる！」とスイッチが入る。次に靴を履きながら「残される唐揚げもかわいそうだ」となり、5分後にはセンターで「アーメンいただきます」となる（よく考えてみれば扉を叩いてもいなかった）。

第2の理由は、毎日出席していると、同じことの繰り返しで新鮮さがなくなってくることである。最近の早天は旧約聖書であり、レビ記を終えて民数記を読み進めている。これらの書は、同じことが繰り返されていたり、祭壇の長さについて詳細にかつ延々と書かれていたりして、正直にいうと「つらい」。恵牧師が解説してくれる環境にあるアシュラムセンターでもそう感じるのだから、毎日聖書を読み、祈りを捧げる「レビの時」を自宅で守ることは、とても忍耐のいることだろう。

それではどうしたら「同じことを続ける」ことができるのか。これについては、様々な答えがあると思うが、リトリートつまり、宿泊して

行われるアシュラムへの参加が一つの答えであると感じている。ちいしば牧師によると、アシュラムとは「生活の場から退いて修めること」（榎本保郎著『ちいしば牧師アシュラムを語る』より）であるが、この「生活の場から退く」時間が、日常生活を帰ったときの活力となる。特に日常でなかなか心が休まるときがない筆者には、とても必要なことだ。例えば、朝から夕方まで働いても、仕事のメールはいつでも入ってくる。できるだけ帰宅後や休日は仕事をしないと決めているが、そうはいかない案件も多い。授業の準備に追われていたり、原稿の締切があったりする時は夢にも出てくる。科学技術が発展したことは生活を便利にし、さまざまな良い影響を及ぼしたことには違いない。しかし、目をさました時に、スマートフォンで仕事のメールを読むことができることは、日々の生活にとって悪夢でしかない。

「せっかく静かな場所に来たのですから、せめてアシュラムの期間中は世俗のかかわりから解き放たれることが大切です。そのために新聞、ラジオ、テレビなどを一切見ないように心がけるべきです。」（前掲書165頁）。これは保郎牧師がアシュラムについて述べた言葉である。もし現代に生きていたならこの中にスマートフォンや携帯電話を加えないだろうか。昔から携帯を使って連絡や仕事をしている人にとっては、2泊3日、携帯をほっぽり出すことには本当に勇気があることだ。でも、そこまで徹底して聖書の言葉に集中する時間、日々の自分を見つめる時間によって、新鮮な気持ちが失われがちな日常に対して、新しく向き合うことができるのではないかと思う。

今日も世界中のどこかでアシュラムが開かれている。人生の重荷を抱えて来る人、聖書を読む喜びを味わいに来る人、動機は人それぞれだろう。さまざまな思いの交錯するアシュラムにおいて、全ての参加者にとって、日常から離れて静かに聖書と自分を見つめることが出来るように。祈り合う仲間との出会いになるように。そして日々の祈りの時が続けられるように、近江八幡の地から祈っている。



10月の聖書教室など	
6(金)	阪神ミニアシュラム (主恩教会 PM1:00)
9(月)	福岡聖書教室 (博多クリオコートホテル PM1:30)
15(日)	ちひろば牧師記念チャペルタ礼拝・愛餐会 (PM5:00)
17(火)	大阪聖書教室 (大阪クリスチャンセンター AM10:30)
18(水)	カフェちひろば聖書入門講座 (京都・伏見区深草 PM1:30)
19(木)	常任運営委員会 (アシュラムセンター)
20(金)	センター聖書教室 (アシュラムセンター AM11:00)
23(月)	静岡聖書教室 (旧・英和女学院宣教師館 PM2:00)
24(火)	東京聖書教室 (御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30)
24(火)	桜美林リトリートアシュラム (桜美林大学荊冠 PM2:30)

10月のアシュラムなど		
2(月)	第11回 河辺一日アシュラム 奉仕者 村瀬俊夫師	0188-46-0876 小林三夫兄
2(月) 3(火)	第41回 山陰アシュラム 奉仕者 榎本恵師	0859-45-3663 宮脇 弘師
9(月)	第7回 岩松アシュラム 奉仕者 新垣達也師	0895-32-2114 新垣由子師
11(火) 12(水)	第5回 日光オリープの里アシュラム 自由参加ツアー(12~13日) 奉仕者 榎本恵師	0748-33-4030 アシュラムセンター
20(金) 21(土)	第22回 北陸・富山アシュラム 奉仕者 村瀬俊夫師	0767-22-5142 岩城輝雄兄
27(金) 28(土)	第18回 愛知一泊アシュラム 奉仕者 村瀬俊夫師	0562-47-0528 溝口勝幸師

11月のアシュラム		
6(月) 7(火)	第38回 札幌アシュラム (札幌サンブラザ) 奉仕者 榎本恵師	011-561-7951 吉田すみゑ姉
21(火) 23(木)	第42回 京浜アシュラム (霊性センター) 奉仕者 村瀬俊夫師	042-373-2577 本田英一師
23(木) 25(土)	第41回 阪神アシュラム (母の家ベテル) 奉仕者 榎本恵師	0748-33-4030 アシュラムセンター

2017年12月以降のアシュラム予定		
12月7日	合同平和祈禱会	★日程変更★
12月9日	合同聖書教室クリスマス愛餐会	

みことば

日本キリスト教団
西川口教会牧師 (埼玉)

金田 佐久子

「主イエスに聴く

マタイ福音書第6章より」

(6) 10節 神の国

「御国が来ますように」。「御国」を直訳すると「あなたの国」です。「天の国」(「神の国」) のことです。洗礼者ヨハネは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と告げ(マタイ3章2節)、悔い改めの洗礼を受けました。主イエスも「悔い改めよ。天の国は近づいた」と宣べ伝え(マタイ4章17節)、ガリラヤで宣教を始められました。さらに、主イエスは弟子たちを派遣するにあたり、「『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい」と命じられました(マタイ10章7節)。ここで「国」と訳されたギリシア語「バシレイア」は、動詞「バシレウオー」(支配する)の名詞形なので、「天の国」(神の国)の意味するところは、「神の御支配」となります。「ガリラヤのイエシュー」の山浦玄嗣先生は「神の国」を「神さまのお取り仕切り」と訳されました。「御国が来ますように」とは、神の御支配を待ち望む祈りです。ヘブライ人への手紙の御言葉が思い出されます。「『すべてのものを彼〔イエス〕に従わせられた』と言われている以上、この方〔イエス〕に従わないものは何も残っていないはず。しかし、わたしたちはいまだに、すべてのものがこの方に従っている様子を見ていません」(ヘブライ2章8節)。教会はうめき続けています。「いまだに」の現実のただ中で「御国が来ますように」と祈らずにはおれません。しかし、この祈りを授けられていること、そこにすでに神の御支配は始まっています。

あとかぎ

8月タイバンコクの日本語キリスト教会で、礼拝奉仕とミニアシュラムの集会を行なってきた。タイでは初めてアシュラムの集会を行ったのだが、若き日、ハワイでアシュラムを経験したことがあるという姉妹もおられた。神様は備えていてくださる。「こんな集会がバンコクでもできることを祈っていたんです。」彼女の言葉に励まされる。9月には、いのちのことば社より、榎本保郎牧師がアシュラム誌「瞑想」に書いた原稿をまとめた『聴くこと祈ること』が出版される。40年前に蒔かれた種が大木となり、すように。(恵)

保郎師の旧約説教
FEBCラジオ
10月より!!